

アジア研究図書館

編集・発行：東京大学アジア研究図書館 館長 小野塚知二

113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学附属図書館 アジア研究図書館担当 asialib@lib.u-tokyo.ac.jp

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/asia>

第2号 目次

- 1 開館記念式典挙行
- 2 アジア研究図書館開館記念シンポジウム「サブジェクト・ライブラリアンの将来像」(3月15日)のご案内
- 3 連載・先達の先見 第2回
小松久男「アジア研究図書館の開館によせて」
- 5 連載・アジアの言語・文字体系 第2回
矢野正隆「国語」と「漢喃」
- 7 連載・奇書・好著 —“書痴学”の勧め— 第2回
菘輪頭量「仏教に見る奇書——刺血写経」
- 10 連載・アジア映画の迷宮 第2回
河原弥生「ユーラシア草原の古代と現代」
- 13 アジア研究図書館開架(総合図書館4階)利用案内
- 13 次号以降の予定

開館記念式典挙行



さる2020年11月26日午前中に、東京大学総合図書館グランドオープンおよびアジア研究図書館開館を記念して式典が催されました。なお、式典は新型コロナウイルス感染症の状況に鑑み、少数の関係者のみで行われました。

五神真総長、藤井輝夫理事・副学長、熊野純彦附属図書館長、小野塚知二アジア研究図書館長、および菘輪頭量人文社会系研究科教授・東京大学附属図書館上廣倫理財

団寄附研究部門長よりそれぞれ挨拶があり、新図書館計画の来し方を振り返り、また将来への期待が語られました。その後、参加者は二組に分かれて、総合図書館内およびアジア研究図書館(総合図書館4階)を見学しました。新図書館計画および式典については[総合図書館ホームページ](#)もご覧ください。



サブジェクト・ライブラリアンの将来像

—日本の大学図書館への導入拡大に向けて—

いよいよ今年4月からサブジェクト・ライブラリアンを配置したアジア研究図書館研究開発部門が附属図書館内に設置されます。そこで3月には、ずばりそのサブジェクト・ライブラリアンをテーマに、ヒューマニティーズセンター、東アジア藝文書院の協力を得て、U-PARLと共催で「サブジェクト・ライブラリアンの将来像—日本の大学図書館への導入拡大に向けて—」と題した開館記念シンポジウムをオンラインで開催します。

このシンポジウムではサブジェクト・ライブラリアン制度の確立と日本の大学図書館への普及に向けて、人材の交流など大学間における連携の重要性とキャリアパスの展開の可能性を検討し、今後の人材の育成・確保のための新しい仕組みを構築する方法とその課題について議論します。1月下旬には申し込み受付を開始する予定です。[アジア研究図書館](#)、[U-PARL](#)のサイトをご覧ください。多くのお申し込みをお待ちしております。

日 時：2021年3月15日(月)9:30~13:00

[第1部]

司 会	上 原 究 一 (U-PARL副部門長)
開会の辞	蓑 輪 顕 量 (U-PARL部門長、人文社会系研究科教授)
アジア研究図書館の紹介	小野塚 知 二 (アジア研究図書館館長、経済学研究科教授)
趣旨説明	中 尾 道 子 (U-PARL特任研究員)
報 告 1	吉 村 亜 弥 子 (シカゴ大学図書館日本研究ライブラリアン)
報 告 2	福 田 名 津 子 (松山大学人文学部准教授)
報 告 3	渡 邊 由 紀 子 (九州大学附属図書館准教授)
コメント1	大 向 一 輝 (人文社会系研究科准教授)
コメント2	北 村 由 美 (京都大学附属図書館研究開発室准教授)

[第2部]パネル・ディスカッション

モデレーター	蓑 輪 顕 量 (U-PARL部門長)
パネラー	小野塚知二、吉村亜弥子、福田名津子、渡邊由紀子、大向一輝、北村由美
閉会の辞	藤 井 輝 夫 (理事・副学長)

共 催：東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門(U-PARL)
東京大学アジア研究図書館

協 力：東京大学ヒューマニティーズセンター(HMC)
東京大学東アジア藝文書院(EAA)

アジア研究図書館の開館によせて

小松久男

(こまつ ひさお 東京大学名誉教授)

アジア研究図書館の開館は、じつに感慨深いものがあります。構想が芽生えたのは2009年のことでした。当時私は人文社会系研究科長の任にありましたが、同期の部局長にはなぜかアジア研究者がそろっていました。これはまさに千載一遇の機会と言ってもよいでしょう。詳しくは古田元夫先生の文章をご覧くださいなのですが(U-PARL編『図書館がつなぐアジアの知』東京大学出版会、2020年、第1章)、この出会いが、ときの濱田純一総長の文系を元気づけようという方針と響き合った結果、アジア研究図書館は新図書館構想の重要な柱の一つとして日の目を見ることになりました。

2010年の秋、濱田総長に提出した基本計画のなかで、アジア研究図書館についてはこう書かれています。

文系・理系の別を問わず、本郷キャンパス内に集積されているアジア関係の膨大な図書・雑誌・新聞・マイクロフィルム・コレクションを総合図書館内の開架書庫に集中する。方法としては、東洋文化研究所の蔵書の大半をここへ移し、これに各部局が拠出した文献や研究資料を合わせて、世界に類のないアジア関係図書コレクションを実現する。これは、アジア研究を重視する東京大学の教育研究の基盤を強化するにちがいない。利用者は、書庫内を自由に巡って図書を探索し、書庫内および

近接したスペースで教育・研究活動にあたることができるようにする。また、この図書館の開館によって、関係部に自由なスペースを創出することも期待することができる。

翌年初め、私は新図書館構想の骨子を科所長会議で報告しましたが、そのとき隣席の理系の研究科長が「久しぶりに大学らしい話を聞いた」と言って賛同してくれたことは、今でもよく覚えています。文系の提案が全学の理解を得られたことはじつに幸いでした。

全学の理解と言えば、ときのキャンパス計画室長、内藤廣先生(建築学)のご協力と助言が大きな力となりました。当初巨大な書庫をどこに作ればよいのか悩んでいた私たちにとって、総合図書館前の広場の地下に300万冊収容の地下書庫を作るという内藤先生のプランは衝撃的な妙案でした。その後、新図書館の設計では気鋭の建築家、川添善行先生(現生産技術研究所准教授)のお世話になりました。この設計には、関東大震災の教訓から図書館前の地下に設置された防火水槽を覆っていた噴水を残すことも含まれていました。

2011年の春、ちょうど文学部の会議室で新図書館計画の打ち合わせをしていたこと、私たちは大きな揺れを感じて建物の外に出ました。3月11日の東日本大震災です。そのために計画には変更や遅延が生じたとはいえ、事業は継続されました。

この間、アジア研究図書館については、公益財団法人上廣倫理財団のご厚意と理解により寄付研究部門（U-PARL）が設けられたことが特筆に値します。アジア研究図書館は、学内外の幅広い協力を得て開設に至ったといえるでしょう。私自身は2012年4月東京外国語大学に移ったため、その後は新図書館計画から離れましたが、本郷キャンパスを訪ねるたびに事業の進展を見るのが楽しみでした。

回顧はここまでとして、アジア研究図書館がその真価を発揮するのはこれからです。この機会にいくつか期待を記しておきましょう。まず、近年気になっているのは、アジア研究分野（私が知っているのはおもにアジア史です）へ進む大学院生が減少していることです。資料や情報、留学や現地調査の機会など、かつてと比べると研究環境はずっとよくなっているはずですが、これをめざす人が少ないのは残念なことです。こうしたなかで、アジア研究図書館には「アジア研究へのいざない」の役割を期待したいと思います。アジア研究の古典から現代の挑戦的な研究まで、あるいは興味深い原典の翻訳など、そこに行けばアジア研究の面白さにふれられる、そうした文庫があれば、学部生にも選択の機会を提供することができるでしょう。一方、研究が進むにつれて当然のことながら関心は特定の分野に特化していきませんが、ときには視野を開いて他分野の研究に触れ、自分の研究を見つめ直す必要も生じることでしょう。こうしたときにアジア研究の多彩な成果にふれる場が用意されていることは有益です。加えて、新設のライブラリープラザではすでにさまざまなイベントが行われていると聞きますが、こうした場でアジア研究に関わるセミナーやブックトークなどを

開くことも「いざない」につながることでしょう。

次は「結ぶ」役割でしょうか。目を外に向ければ、日本にはアジア経済研究所、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、京都大学東南アジア地域研究研究所、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、公益財団法人東洋文庫など、アジア研究の拠点がいくつも存在しています。アジア研究図書館が、こうした研究拠点と提携しつつ、独自の強みを発揮していけば、総体としての日本のアジア研究の進展に大きく貢献することができるにちがいありません。一方、海外の研究機関や研究者とアジア研究図書館とを「結ぶ」ことも重要な課題となることでしょう。この面ではすでに若手研究者の皆さんによる重要な成果、U-PARL編『世界の図書館から－アジア研究のための図書館・公文書館ガイド』（勉誠出版、2019年）が出されており、今後の進展が大いに期待されます。

最後に余談を一つ。1980年代にロンドン大学アジア・アフリカ研究学部(SOAS)の図書館にいたときのことです。当時の日本には希少な中央アジア近代史関係の資料を探して書棚の本を片っ端から見ると、背面に落下している冊子が目にとまりました。中を読んでみると、それは1898年に中央アジアで起こったムスリムの蜂起を鎮圧したばかりのロシア人総督がニコライ2世に提出した上奏文で、私にとっては大発見です。これは帰国後に全訳し、訳注をつけて発表しました。本の落下など、アジア研究図書館のよく整頓された書棚ではよもや起こりえないことですが、図書館とは末永く本との偶然の出会いを提供する場であってほしいと願っています。

「国語」と「漢喃」

矢野正隆

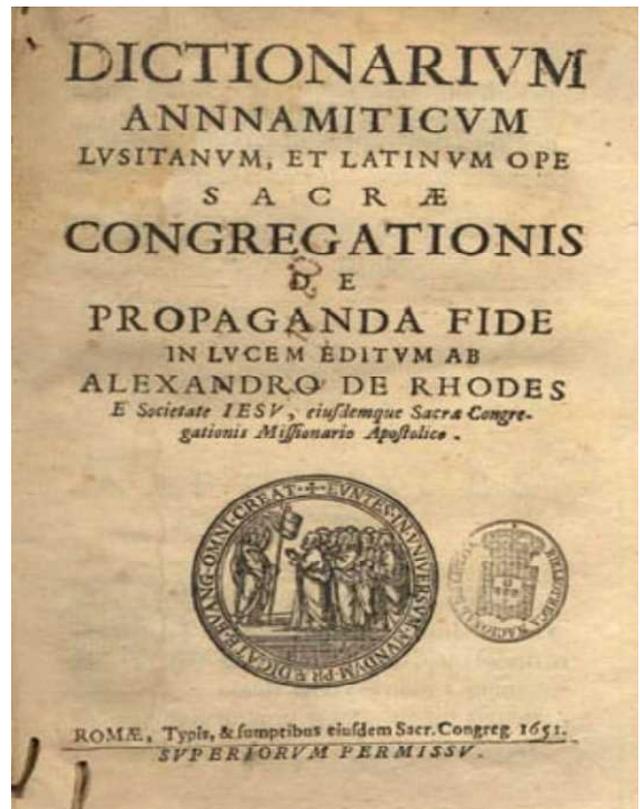
(やの まさたか 東京大学経済学研究科助教)

ベトナムが、日本や朝鮮とともに漢字文化圏にあること、また、この国で用いられる独特のローマ字表記が宣教師の創意に拠るものであることは、知る人も少なくないであろう。ここでは、ベトナムで用いられる文字について、周囲の異文化との関係という面から、ごく簡単に紹介する（なお、「ベトナム」「ベトナム語」は、ベトナム社会主義共和国の主要民族であるベト族（キン族ともいう）が歴史的に支配してきた領域・使用してきた言語を指すものとする）。

クオック・グー

こんにちのベトナム語の正書法であるクオック・グー (quốc ngữ) で用いられるのは、ISO基本ラテンアルファベットの26字からf, j, w, zを除き、子音字母đ、母音字母ă, â, ê, ô, ơ, u、そして複合字母ch, gh, gi, kh, ng (ngh), nh, ph, th, tr(2字で1音)を加えた計39種である。これを[頭子音-介母音-母音-末子音]の順に組み合わせ(必須要素は母音のみ)、さらに、6種からなる声調を加えることによって、最小単位である音節を構成する。たとえば上記の「quốc ngữ」は、「quốc」「ngữ」2つの音節からなり、前者は[頭子音q - 介母音u - 母音ô - 末子音c]の閉音節(末子音を含む)に「鋭い声調thanh sắc」を、後者は[頭子音ng - 母音u]の開音節(末子音を含まない)に「転ぶ声調thanh ngã」を加えたものである。

アレクサンドル・ド・ロードの『[ベトナム語・ポルトガル語・ラテン語辞典](#)』(1651年



ローマ刊)は、このような文字体系が、ベトナムで布教に従事したイエズス会宣教師によって、17世紀の段階で、こんにちに近いレベルにまで整備されていたことを伝える。しかし、この表記は、もともと宣教や、あるいは、植民地支配における現地人エリート養成といった限定的な局面で用いられるもので、これが一般に広まるのは、20世紀に精力的に推進された普及活動以降のことであった。では、それ以前のベトナムにおける文字環境はどのようなものであったか。

ハンノム

日本や朝鮮と同様に、ベトナムも、自らの民族語を記す固有の手段を有する以前

に、漢字が大量に流入したことから、その語彙において、漢語からの借用語が非常に大きな比重を占めている。このことは、千年以上に及ぶ中華諸王朝による支配(前111～939年、「北属期」と呼ばれる)という歴史的経緯だけでなく、その言語体系が、漢語と同様の単音節・孤立語型であることに拠っており、その借用は、名詞や動詞、形容詞などの「実詞」に限らず、文法語彙である「虚詞」にまで及んでいる。読みについて言えば、「国語」という漢字に対して、日本語が「コクゴ」という音を有するように、ベトナム語では「quốc ngữ」という音を持つ(「ベトナム漢字音」「漢越音」と呼ばれる)。漢字で記されるのは、言うまでもなく、外国語としての漢語であり、これを用いるのはごく僅かの支配層や知識人に限られていた。では、これに対するベトナムの「国語」とはいったい何だったのか。

民族語を表記しようとする試みは、日本における万葉仮名のような、六書の「仮借」の方法で、北属期から行われていたが、これに加えて、「形声」「会意」といった方法で次々に新字が創られ、のちにチュウ・ノム(「字喃chữ nôm」=話し言葉の文字)と呼ばれることになる独自の文字体系を持つにいたったのは、独立後しばらく経ってからのこととされる(13世紀頃)。王朝時代の歴史書である『大越史記全書』には、「我国賦詩多用国語、実自此始。」といった記載がみられるが(本紀巻5、1282年8月条、同巻6、1306年6月条)、ここに記される「国語」がそれにあたる。この文字は、詩文において特に16世紀以降盛んに用いられることになるが、あくまで支配言語としての漢語(「字儒chữ nho」「字漢chữ hán」)に対する俗語(喃nôm)という位置づけであり、さらに、以下に示すように、その造字方法が漢字を前提としたものであったため、漢字の知識のない一般民衆に習得を望むことはできなかった。チュウ・ノムは、「国語」と称しつつ、

現代的意味でのnational languageの位置を占めるものではなかったのである。

さて、以上のような抽象的な説明では、実際のところはなかなか理解し難いであろう。そこで以下、近世の実用書における具体的な文字遣いを紹介し、外国語としての漢語と、国語としてのチュウ・ノムがどのように表記されていたか、その一端を示す。

ここに紹介するのは、『九章算法立成』(ハノイ漢喃研究院蔵、架蔵番号AB407)という近世の数学書であるが、その中に、収税や土地測量といった業務担当者向けであろうか、Q&A式の事務マニュアルのような体裁をとった部分が含まれている。抄写の年代は不明であるが、内容からすると、黎朝後期(17-18世紀)のものと推定される。ここから、「通使銭為古銭法」と題する、銭貨のレートに関する①問いと答えそして②解説からなる一節を見てみる。

①は「今有使銭一十二貫三陌四十五文。問古銭為若干。答曰、古銭実得七貫四陌十五文。」と漢語で記されており、これは「kim hữ sử tiền nhất thập nhị quán tam mạch tứ thập ngũ văn…」のように、漢越音で読まれたであろう。「使銭」「古銭」は銭種の違いであり、ここでは前者が後者の幾らに相当するのかを問うている。②は①の答えを導出する過程をチュウ・ノムで記したもので、冒頭の「_A使銭_B古銭_C。原課_D用_E銅_F季_G。麻_H季_I。遊_J銅_K諫…」を瞥見するだけでも、漢字のパーツを組み合わせた独特の文字が用いられていること、文法的に漢文の読み方では理解不能であることが分かるだろう。Aにある「_B」は「羅」の略字で「là(繫詞「～である」)」と読む。この部分の読みは「sử tiền là tiền giá, củ tiền là tiền quý」で、意味は「[漢語の]使銭とは[ベトナム語の]tiền giá(銭諫)のことであり、[漢語の]古銭とは[ベトナム語の]tiền quý(銭季)のことである」となる。漢語では修飾語-被修飾語の順である

のに対して、ベトナム語では逆の順であることが見て取れるだろう。なお、「*tiền gián*」「*tiền quý*」については、上記ロードの辞書に採録され(「小さな銭」「大きな銭」、また、同じロードによる著作(*Histoire du royaume de Tunquin, et des grands progres que la prédication de l'Évangile y a faits en la conversion des infidelles, depuis l'année 1627 jusques à l'année 1646*, Lyon, 1651)にもその実態が紹介されており、17世紀初頭の日本からの銅銭の輸出から派生した現象として注目されている。Bの「𠄎」は音符「巴」と意符「三」による形声文字で、「ba(数字の3)」と読む。「銅」は「đồng」の音を借りたもので、現在のベトナムの通貨単位「ドン」に通じる。ここでは銭の単位である「文」に相当する。「𠄎」は「爲」の省略形で意味を借りたもので、「lâm(～する、～になる)」と読む。「𠄎」は音符「南」と意符「五」からなる形声文字で「năm(数字の5)」と読む。以下同様にして、この部分は「*ba đồng quý làm năm đồng gián, mà sáu quý làm mười đồng gián*。(古銭3文

は使銭5文になり、古銭6文は使銭10文になる)」と読むことができる。

このようなごく僅かな用例からも、漢字と字喃が文字として分かちがたく結びついていること、しかし漢語とベトナム語が文法的には別系統のものであることが知られるであろう。この2つの、現代ベトナムでは用いられることのない文字体系は、合わせて「漢喃 *hán nôm*」と呼び慣わされ、「国語 *quốc ngữ*」と対置されている。このような国語と外国語が輻輳するというベトナム語の在り方は、異文化との角逐を辿ったベトナムの歴史を刻印したものであるとも言えるであろう。

参考文献

- 清水政明「ベトナム語」『東南アジア文化事典』164-167頁、丸善出版、2019.10
富田健次「ヴェトナム語」『言語学大辞典』1上759-787頁、三省堂、1988.3
三根谷徹『中古漢語と越南漢字音』汲古書院1993.5

連載

奇書・好著 —"書痴学"の勧め—

第2回

仏教に見る奇書——刺血写経

袁 輪 顕 量

みのわ けんりょう 東京大学人文社会系研究科教授

東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門(U-PARL)部門長

仏教における経典は、もともとは出家修行者(比丘、比丘尼)たちの暗誦によって伝えられてきた。初期仏教において、ブツダのそばに付き従ったアーナンダ(阿難)は、多聞第一と評されるが、ブツダの教えを身近に聞き、次の世代に伝えた重要な人物であった。そのような口承の経典が文字に識され、貝葉写本ばいようが成立したのは紀元前後のころと推定されている。そして、経論

の文字化と、すべての人を悟りの世界に渡すのだという理想を掲げた大乘仏教とは密接な関係にあったと考えられている。

貝葉写本というのは椰子の葉に堅い金属で文字を刻みつけ、そこに墨などの色素を入れてはつきりとわかるようにしたものである。このようなタイプの写本は、材料が植物の椰子の葉であるから、比較的早くに朽ちていく運命にあり、長くても400年く

らいしか持たない。やがて紙が発明されると、経典の文字を紙に記すようになるのであるが、この紙に識したものは千年を超えて後代に伝えられることになった。

暗誦も文字化も、ともにブツダの教えを後代に残そうとした営みであることに変わりはないのであるが、それらの経典(時には論典や律典も含んで)は、東アジア世界に伝えられると、当地の人々の理解しやすいよう漢語に翻訳された。現地の言葉で教えを説くようにとのブツダの教えが守られ、経典は広まった先の言語に翻訳されたのである。この点は翻訳を許さない宗教と比較してみれば、大きな相違であることは否めない。しかし、翻訳には多くの困難が伴い、4世紀に登場した釈道安(314-385年)には、すでに翻訳論が存在する。

さて、東アジア世界では経典が翻訳されると紙に写され、流布することとなった。最初は手書きで墨を使い、経典の文字を一字ずつ写したのであるが、それでは間違いも発生しやすく、また完成する部数も少ない。そこで、中国では印刷が用いられるようになった。版木に起こして印刷してしまえば、一度に大量に経典を生産することができ、どのような時代になってもブツダの教えが残ると考えたのである。このようにして経典は再生産されるようになった。その最たるものが大蔵経の刊行であった。

さて、経典が印刷されるようになると、今度は逆に手書きの写本に良さを見いだすような価値観も生まれた。その中で生まれたものがいわゆる装飾経である。有名どころは紺色の紙に金泥で文字を書き厳島神社に奉納された『法華経』や、『久能寺経』と呼ばれる藤色の料紙に墨書された『法華経』などである。これらの装飾経は、料紙自体に色づけが施されたもの(金や銀の箔

も含む)と、文字自体が金泥、銀泥などで書かれたものという二種類に大きく分けることができよう。このような装飾経は豪華であることから、時の権力者が自らの力を誇示するために制作させたものが多いが、財力の誇示のためではなく、信仰心を見せるために、個人によって作られたと考えられる奇書とも言えるような代物も存在する。それが刺血写経(または血写経)である。

血写経というのは、文字通り、人間の血を墨代わりに使って経文を写したものである。自らの指に鋭利な刃物で傷を付け、にじみ出てくる血を筆に付け、一文字一文字、写経するものという。多くの血を出してしまつては大げがになりかねないので、一日に書写できる分量はわずかであると聞く。自らの血液で経典を書写するのは、個人的な深い願いを叶えるため、信仰心を表現するためなどが考えられる。日本では、『増鏡』巻九「草枕」の中に登場する後深草院の「御指の血を出して御手づから法花経など書かせ給ふ」の記事が有名であろうか。

血写経の起源は、一般に菩薩戒を説いたとされる『梵網経』^{ぼんもうきょう}にあるとされるが、もう少し早い起源が、中国において有ったようである。鳩摩羅什(344-413年)訳の『集一切福德三昧経』^{しゅういつさいふくとくさんまいきょう}巻中に、最勝仙という仙人が仏の偈の一部分のみを聞き、悪魔の天子が、もしその偈を聞きたいのなら、「汝今、若し能く皮を剥ぎ紙と為し、血を以て墨と為し、骨を折りて筆と為し、此の偈を書写せば、乃ち當に佛の所説の偈を相い与えん」(大正12, 995c)と言ったとの記事が見える。悪魔が仙人にそそのかした内容であるが、ここに血を以て墨とするという記事が存在する。おそらく初出であろう。また、曇無讖(385-433年)訳の『大般涅槃経』^{だいはつねはんぎょう}巻第十四に、迦葉菩薩が仏の教えを聞き、

その教えを人々に知らせるために、私は今「皮を剥ぎ紙と為し、刺血を墨と為し、髓を以て水と為し、骨を折りて筆と為し、如是の如き大涅槃經を書写せん」(大正12, 449 a)と述べたという文章が存在している。

そして、同じく「血を持って墨とする」という記述を持つ經典として、唐代に般若三藏によって翻訳された四十卷『華嚴經』が存在する。この經典の卷四十には、「仏に随って学ぶとは」として次のように言及される。「次に善男子よ。常に仏に随いて学ぶと言うは、此の如き娑婆世界の毘盧遮那如来は、初発心より精進して退かず、不可説不可説の身命を以て布施を為す。皮を剥ぎて紙と為し、骨を折りて筆となし、刺血を墨と為し、經典を書写し、積むこと須弥のごとし。法を重んじるが為の故に身命を惜しまず」(大正10, 845c)と出てくる。

この四十卷本『華嚴經』は善財童子の求法の旅を記したのものとして広く知られることになるのであるが、それと相俟って仏法を重んじ、たとえ自分の身体であっても惜しまないことを表明するために、自らの血を持って墨と為し、經典を書写することの有力な典拠として一人歩きすることになり、また実際に元明代には血写が盛んとなった。



西園戒幢律寺山門

そして実際に、『華嚴經』の血写經が存在するのである。場所は中国の江蘇省蘇州市内にある西園戒幢律寺、別名西園寺である。この寺院は元の至元年間(1264-1294年)の創建と伝えられ、それほど古くはないが、寺院の境内に、血書の八十卷本『華嚴經』が、石造りの立派な格納庫に収納されて鎮座している。そこに納められた血写經の現物を拝見することはできなかったが、元代のものと言ひ、確かに実践に移した人が居たことを知らせてくれる。



戒幢律寺の血書華嚴經を収めた龕室

翻って日本における血写經の例を探ってみれば、近世の時代、黄檗宗の中に若干の例らしきものを見いだすことができる。日本の黄檗宗は江戸時代に隠元隆琦(1592-1673年)によって明代の臨濟宗が伝えられたものであり、やはり『華嚴經』を重視したところが認められる。血写經はその影響と思われるが、『般若心經』の血写經と思しきものが伝わる。内心たじろいでしまうが、制作した人の信仰心の厚さと熱心さが確かに彷彿されるものである。仏教の奇書としてしまうことには多少、躊躇するところがあるが、それでも貴重な信仰の証であり、「刺血を墨」とした点を重視すれば、やはり奇書の部類に入るであろう。

ユーラシア草原の古代と現代

河原 弥生

(かわはら やよい 東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門(U-PARL)特任研究員)

中央アジアの映画を観たことがありますか。日本で上映される機会は限られているので、アジア映画が好きでも観たことがないという人が多いかもしれません。

今回はカザフスタンの最新の歴史映画『女王トミュリス 史上最強の戦士』(2019年、Akan Satayev監督、第26回L'Étrange Festivalの長編映画部門で新ジャンル大賞受賞)をご紹介します。



『女王トミュリス 史上最強の戦士』

カザフスタンは日本の7倍の国土面積を持つ中央アジアの大国です。ソ連邦の解体

により独立した若い国ですが、ソ連時代からの映画制作技術には定評があり、近年も国際市場で高評価される作品がいくつも生まれ出されています。この映画はスケールの大きな話題作で、紀元前6世紀にアケメネス朝ペルシアとの大戦争に勝利したユーラシア草原の騎馬遊牧民マッサゲタイの女王が主人公です。

マッサゲタイは文字記録を残していませんが、ヘロドトスの『歴史』によってその姿が今日まで伝えられています。彼らはカスピ海東部からアラル海東方(現在のカザフスタン西部)に住む勇猛な民族で、同時代のイラン系遊牧民スキタイと同種であったといいます。当時夫に先立たれたトミュリスという名の女性が女王でしたが、同じ頃ペルシア帝国のキュロス大王が、草原の支配を狙ってきます。キュロスはまず使者を派遣してトミュリスを妻に迎えたいと申し出ますが、意図を見抜いたトミュリスは拒絶します。キュロスは大軍を率いて侵攻し、トミュリスの息子をおびき寄せて人質にします。息子はそれを恥じて自決します。それを知ったトミュリスはペルシア軍と全対決し、激戦の末にキュロスを殺しました。トミュリスはキュロスの首を切って人血を満たした革袋に投げ込み、「私は生き永らえ戦いにはそなたに勝ったが、所詮はわが子を謀略にかけて捕らえたそなたの勝ちであった。さあ約束通りそなたを血に飽かせてやろう」と言ったと伝えられています*1。この逸話は後の西洋の芸術家を魅

*1. 古代のユーラシア草原に国家を築いた遊牧民については、最新の考古学の成果を収めた林俊雄『スキタイと匈奴遊牧の文明』(講談社学術文庫、興亡の世界史)講談社、2017年がお勧めです。

了し、17世紀のバロック絵画の巨匠ルーベンスも題材にしています。

なお、古代のユーラシアの草原ではこのようなイラン系の遊牧民が分布していましたが、長い年月を経て中央ユーラシアのほとんどの地域はテュルク*2化し、現在では東はシベリアから西はトルコまでテュルク系の民族が広く居住しており、カザフ人も例外ではありません。そのカザフスタンでこのような歴史映画が作られるのは、国内でこれらの遊牧民の遺跡がいくつも発掘され、カザフスタンの古代史と位置付けられて重視されているからです。

さて、本作品はヘロドトスの伝える情報にほぼ忠実に従って構成されています。「ほぼ」というのは、史料の僅かな記述に多くの脚色がなされていることももちろんですが、この話をヘロドトスではなく、9～10世紀のイスラーム哲学者ファーラービーがバグダードで語り伝えているという形式をとっていることと、作品中でマッサゲタイや周辺の遊牧民が「古代テュルク語」を話していることが大きな理由です。これらについては後述します。

映画としての面白さは、前半では少女トミュリスが部族の統率者として強く美しく成長する過程でしょう。マッサゲタイの長であった父と家族全員を殺されたトミュリスは、かろうじて逃げのび、サルマタイという部族に受け入れられて成長します。サルマタイは、ヘロドトスが伝説的な女戦士アマゾン族とスキタイの一部が合流して形成されたと伝えるサウロマタイの後継者と考えられている遊牧民ですが、この作品でもサルマタイは女戦士の集団として描かれ、トミュリスが復讐のための鍛錬に励む文脈で絶妙な役割を果たしています。トミュリスは強さと優れたリーダーシップによってマッサゲタイの再興を果たし、その過程で

彼女の強さに魅せられた他部族の長の息子と結婚し、息子にも恵まれ、平和な遊牧民連合を築きます。後半は、再び大切な家族を失ったトミュリスが、キュロス大王率いるペルシア帝国軍と激突する一大戦争スペクタクルです。ヘロドトスの記述とはやや異なり、キュロスに夫と息子を殺され、怒りに震えるトミュリスは遊牧民連合の強大な軍事力をもってキュロスに戦いを挑むのです。両軍の兵馬が入り乱れる大戦闘が繰り広げられたすえ、血の滴る革袋を持って立つトミュリスがヘロドトスの伝える通りの言葉を放って終わります。

孤独な少女の成長、女性リーダーの誕生、恋愛、戦闘シーンとテンポの良い展開に目が離せず、2時間強の上映時間があったという間です。首都ヌルスルタン*3で初公開されるや大きな反響を呼び、日本を含む10か国以上に興行権が売却されたことも納得できます。しかし、本作品は制作中から批判的に話題になった作品でもありました。最大の理由は、上述のように、マッサゲタイはイラン系であると考えられるにも関わらず、「古代テュルク語」が用いられたからです。そもそも、イラン系かテュルク系かという問題以前に、現在知られているテュルク語文献の最古のものは7世紀の突厥碑文ですので、紀元前6世紀の出来事をあえて「古代」のテュルク語で演じることが議論の的になったのです（それにしても、作品中の言語はどのように時代考証されたのでしょうか）。むしろ視聴者に応じて現代のカザフ語で演じられたのであれば、それがテュルク系言語であるからといってこれほどの議論が起こることはなかったでしょう。

この点を含め、この映画は、アケメネス朝ペルシア帝国を歴史的祖先とみなしているイランにおいて特に議論を呼びました。一つには同じくイラン系であるはずマッサ

*2. テュルクはトルコと同義ですが、トルコ共和国との混同を避けるために、ここではテュルクの表記を用います。

*3. カザフスタンの首都は、1997年にアルマトイからアスタナに遷都され、2019年に就任したトカエフ大統領により、ヌルスルタン・ナザルバエフ初代大統領を記念してヌルスルタンに改称されました。

ゲタイを、まるでカザフ人の祖先であるかのように描いていることへの批判です。また、ヘロドトスの記述は一つの伝説に過ぎず、キュロスの最期については異説もあるうえ、この戦争は全体としてはペルシアの勝利だったという歴史研究の見解もあるため、イラン側には主題自体が侮辱的だと受け止められたようです。イランのマスメディアから取材を受けたサタエフ監督はこれらの指摘に対して「トミュリスとカザフ人の間には関係があります。彼らはまさしく私たちが今住んでいる土地に住んでいたのですから」とかわし、「こうした疑問は史料の著者ヘロドトスに向けられるべきです」と答えています。文句ならヘロドトスに言ってくれ、というわけです。

一方で、カザフスタンのニュースサイトに掲載された主演女優アルミラ・トゥルスン(Almira Tursyn)のインタビュー記事によると、15,000人の候補者からこの役に抜擢された際に、「トミュリスを演じる女優はカザフ人ではない」と残念がる意見が多く寄せられたそうです。双方の祖父がそれぞれタタール人とユダヤ人という彼女は、これに答えて「私は自分を完全にカザフ人だと思っています。私の両方の祖母はカザフ人だからです。カザフ女性に育てられた父も母もカザフ人です」と自身のカザフ人としてのアイデンティティを力説しています。イランの批判などは意に介さず、マッサゲタイの役は生粋のカザフ人が担うべきだと考える人が多いというこの現象には、近年のカザフスタンのナショナリズムの高揚が見てとれ、興味深いです。また、この映画がデビュー作だという彼女は、カザフスタン国立大学とモスクワ大学で学んだ才媛で、一児の母だそうです。彼女は多民族国家カザフスタン(カザフ人は70%弱で、他はロシア人、ウズベク人など)で活躍する女性の象徴としても注目を浴びているようです。

もう一点補足しておく、この映画には、カザフスタンの独立以来2019年まで27年にわたってその急成長を牽引したナザルバエフ初代大統領の三女アリヤ・ナザルバエワ氏が脚本とプロデュースを担っており、650万ドルという莫大な制作費にカザフスタンの国家予算が投じられたことも話題になりました。カザフ草原に馬を馳せる女性リーダーを描くこの映画が、元大統領の長女で前カザフスタン議会上院議長のダリガ・ナザルバエワ氏の次の大統領選出馬への布石であると疑う向きもあったようです。

このように様々な話題を呼んだ本作ですが、作中でこの伝説をヘロドトスではなく、ファーラービーに語らせる構成になっているのはなかなか秀逸です。テュルク系の人々が実在した時代に枠をずらすとともに、創作であるという前提をうまく示すことができているからです。ちなみにファーラービーは現在のカザフスタン南部の出身と考えられており、カザフスタンの偉人として紙幣にも描かれていますが、実は彼についても出自がテュルク系か、イラン系かの議論があるのです。こうしてみると、ユーラシア大陸を舞台に、いかに古くから多くの集団が栄枯盛衰し、言語や民族が行き来してきたのか、スケールの大きさに思いを馳せてしまいますが、今ここに生きている当事者たちの民族アイデンティティにとってはとても繊細な問題なのです。

こうした両国での議論をよそに、アメリカの娯楽情報誌『Variety』で、トミュリスがずばり「カザフの女王」と紹介されたのは、部外者のとても素直な受け止め方と言えるでしょう。「女王トミュリス」は、日本では2020年9月末に1週間限定で上映されて終わりましたが*4、いくつかの映画配信サービスでレンタルできるので、興味を持たれた方はぜひ観てみてください。

*4. 映画の予告編は以下のURLから見られます。 <https://www.youtube.com/watch?v=yGfN7vg1Lcs>

アジア研究図書館開架（総合図書館4階）利用案内

開館日：以下閉館日を除くすべての日

閉館日：年末年始(12月28日～1月3日)

定例休館日(概ね毎月第4木曜日)

夏季の一斉休業日(2日間)

試験等大学行事のための閉館日

その他臨時閉館も含め、アジア研究図書館の開館日・開館時間は総合図書館本館と同じです。

詳細はホームページをご覧ください。

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/general/user-guide/calendar>

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/asia>

開館時間(総合図書館本館の開館時間と同じ)

曜日等	通常期	8月・3月
月～金曜日	8:30～22:30	8:30～21:00
土・日・祝日	9:00～19:00	9:00～17:00

貸出冊数・期間：10冊・30日(教職員・学生)

カウンターサービス：平日9:00～17:00

この時間以外の貸出は、自動貸出機、返却は1階総合カウンターへお持ちください。

学外者：学外者のご利用につきましては、ホームページをご覧ください

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/asia/user-guide/guide>

次号以降の予定

第3号は4月1日に、第4号は7月1日に発行予定です。

アジア研究図書館の取書状況など図書館機能の充実と、研究機能の展開状況についてお知らせするほか、アジア研究図書館と、東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付部門(U-PARL)、東京大学ヒューマニティーズセンター(HMC)、東京大学東アジア藝文書院(EAA)など連携プロジェクトとの共同の催事についてもご案内いたします。

四つの連載記事(先達の先見、アジアの言語・文字体系、奇書・好著 —“書痴学”の勧め—、アジア映画の迷宮)も続きます。

ニュースレターへの情報提供・投稿や、記事へのご要望があれば、東京大学アジア研究図書館宛(asialib@lib.u-tokyo.ac.jp)お知らせ下さい。

編集後記

恭賀新年。第2号をお届けいたします。

「当面季刊を目指す、刊行間隔が三ヶ月以上となることもありうる」という、めいっばい緩い条件を自らに課して、ニュースレターの刊行は始まりました。2号出した時点では、原稿さえ集まるなら(≡書き手がいるなら)、隔月刊も難しくはないと感じていますが、それは、頂戴した原稿を紙面に組むことしかやっていない者の言うことで、一番大事なのは原稿であり、その書き手です。

左側(次号以降の予定)にも書きましたが、読者のみなさまからの情報提供や投稿も大歓迎ですので、ぜひお寄せ下さい。アジア研究というのは、深く耕すなら、ほとんど際限なく、さまざまな作物が収穫できる広い沃野だと考えています。

このニュースレターをみなさまとともに育てていくと、どう大化けするのか、それが楽しみです。本年もどうかよろしく願いいたします。 [D]